

マレーシアWau(ワウ)のように、色鮮やかで誇り高いマレーシアの伝統芸能、ごはん、映画に焦点をあて、専門家がディープにご紹介するフリーペーパー

TAKE FREE

WAW

Malaysia Cultural Post

芸能・映画・ごはん...
マレーシア文化通信



マレーシアでトップクラスの食品会社、「デウィナ・フード・インダストリーズ」。創業者は、ダト・スリ・イブラヒム・ビン・ハジ・アハマド氏(以下、イブラヒム会長)。マレーシアの元首相であるアブドラ・バダウィ氏を兄にもつ、エリート家系の人物です。2012年に、海外初の法人として日本法人「ブラヒムフードジャパン」を設立。マレーシア料理のすばらしさを日本人に伝えたい。その思いの原点には、ある日本人との関わりがありました。

食卓から、世界へ

文・撮影 Oto Furukawa (Malaysia Food Net)
写真協力 Brahim's Food Japan

イブラヒム会長(左手前)と家族。
2003年、ペナンのご自宅にて



日本人のパートナー、アベタツノ氏(左)



オーストラリアでも、ブラヒム商品は人気



左は、温めるだけで簡単にマレーシア料理が味わえるレトルトタイプ。右は、食材を入れて調理するソースタイプ



ソースには、一般のスーパーでは購入が難しいスパイスも入っていて、現地の味が再現できる
ダト・スリ・イブラヒム・ビン・ハジ・アハマド会長

ライフスタイルの変遷

今から40年ほど前、マレーシアで売られていたスパイスは、粒状(ホール)のものでした。料理に使うには、まず、水洗いし、天日で乾かしてからフライパンでからいり。水分がしっかりとんだら、バトウギリシという石臼でひいて粉状(パウダー)に。熱した油でよく炒めて香り立たせ、それからようやく、肉や魚、野菜などの具材や水分を加えて煮込む...という、たいへん手間のかかる作業でした。ひとつの料理を作るのに、3時間以上はかかったそうです。

その後、粉状のパウダー・スパイスが生まれ、「カレーパウダー」「ルンダンパウダー」のように料理に合わせたミックス・スパイスも登場。そして1986年、マレーシア初のレトルト食品会社として、「デウィナ・フード・インダストリーズ」が創業。「ブラヒム」というブランド名で、クッキングソースの販売がスタートしました。具材を加えるだけで、本格的なマレーシア料理を作ることのできるブラヒムのクッキングソースは、多忙な生活をおくるマレーシア人の願いからうまれたのです。

台所で過ごした時間

「子どものころ、母の料理の手伝いをよくしました」と話すイブラヒム会長。「幼いころから料理に人一倍興味があり、包丁でミンチ用の肉をひたすら細かく刻むのが、僕の好きなお手伝いでした」と語ります。その時の経験が、今の仕事につながっているのです。

日本人の技術者、アベ氏の出会い

実は、デウィナ・フード・インダストリーズの創業には、ある日本人が深く関わっています。当時、アメリカで軍用として開発されたレトルトパウチは、日本人技術者のアベタツノ氏によって商品化。イブラヒム会長は、日本に何度も足を運んでアベ氏と交渉し、パートナーシップを結ぶことに成功!この高度な技術力によってブラヒム商品は誕生し、30年経った今もなお、事業の核となっています。

人気ナンバーワンはルンダンペースト

さて、多数のブラヒム商品のなかで、一番人気は「ルンダンペースト」。スパイスの香り高く、濃厚な味に仕上がるため、本国マレーシアだけでなく、お隣のインドネシア、そして欧米でも人気とのこと。

イブラヒム会長のおすすめは「フィッシュカレーソース」。鮭の頭を加えて、フィッシュヘッドカレーにするのがお気に入り。また、現在オーストラリア在住の次女アジザさんは「ハニーチキンソース」を家に常備。「フライパンで鶏肉を焼き、最後にソースをからめるだけで、マレーシアの味になるんです」と教えてくれました。

創業から30年、革新的な技術で、マレーシアの伝統の味を守る同社。「僕らの誇りであるマレーシア料理を世界中の人に知らせたい」。イブラヒム会長の挑戦はまだ続きます。

日本で販売している商品は全18種(価格は300~600円)。温めるだけの簡単レトルトカレー6種(チキンカレー、チキンルンダン等)、肉や魚などの具材を加えて作るペースト12種。ちなみに、「スパイスシートソース」は、女性誌『Mart』で読者イチオシの商品として紹介されるほど人気。商品に関する問い合わせは、ブラヒムフードジャパンまで。

ブラヒムフードジャパン <http://www.brahimsfoodjapan.com>

かけがえのない存在のために歌う

歌手としてのアディバ・ノール

日本ではヤスミン・アフマド監督の映画『細い目』のお手伝いさん役や、現在日本の劇場で公開中の『タレントタイム〜優しい歌』の先生役など、女優としての姿が知られているアディバ・ノールさんですが、もともと歌手として高く評価されている方です。今回は、歌手としてのアディバさんについてお話を聞きました。



取材・文 Aki Uehara
(Makara Arts Production)
取材協力 ムヴィオラ

歌手になる前は学校で英語教師をされていました。歌手になったきっかけを教えてください。

幼い頃から音楽が大好きでした。おもちゃの木琴やトビピアノで、子守唄よりも流行りのポップソングなどを弾いていました。でも残念なことに音楽を学校で専攻することはできず、学校から帰宅すると共働きの両親や兄弟が帰ってくる前に一人で思い切り歌っていました。

学校で教師の仕事を始めてからも、歌うことは趣味で続けていました。ある時から毎日授業が終わるとカラオケ店に通うようになり、そこで出会った仲間にも勧められて歌のコンテストに参加したのです。ただ彼らを喜ばせるためでした。そして、ある日はテレビで生放送されるような大きな歌の大会で優勝したのです。そこから私の歌手としての人生が始まりました。

2006年、マレーシアの歌謡賞Anugerah Juara Laguで最優秀賞を受賞した『Telalu Istimewa』は、アディバさんの代名詞的な曲になりました。美しいメロディーと歌詞がとても印象的でした。

ありがとついでに、この曲は本当に神様からの贈り物でした。実は、とても悲しい少女暴行殺人事件をきっかけにできた曲です。家族の

歌手・女優

ADIBAH NOOR

アディバ・ノール



中でも特別な存在だった10歳の少女の命が奪われた事件に私は大きな衝撃を受け、人々にこの事件を忘れて欲しくなくて、どうしても何か曲を作りたいと思いました。大切な子供たちの安全を守ってほしい、と願う私の個人的な啓発活動のようなものでした。歌詞は、もし少女が生きていたらどんな人生を歩んだらうか、など、この少女に対して感じた私の想いでした。彼女が天国で人生の秘密、ミステリー、生きることをすべてについて悟ったり、神様や預言者から様々なストーリーを聞かされているのではないかと想像しました。曲名『Telalu Istimewa』(あまりにも特別な)は、あなたは特別以上の存在である、ということを表現できる言葉が見つからず、「あまりにも特別な」かけがえのない存在であり、神様に召されたのだという意味を込めました。

現在製作中のアルバムは、マレーシアの様々なアーティストが参加しているのですが、完成が楽しみです。

収録曲は全てマレーシアで活躍する歌手とのデュエット曲です。参加アーティストは、Sam (Innuendo) / Nasser Wahab / Nizam / Dina Nadzir / Atia / Anuar Zain / Amir Jahari / Misha Omar となります。タイトルは「収録曲の1つ Misha Omar との曲から JIWA SENTUH

JIWA」となる予定です。

*「魂が魂にふれる」の意

テレビ番組『DuoStar』で審査員をされました。マレーシア音楽界の新人や、将来をどのように展望されますか？

この番組は、すでにプロとして活躍している歌手によるデュエットのコンテストで、マレーシアのテレビ番組では初めての試みでした。私は審査員として関わることができたことを光栄に思いますし、とても楽しむことができました。マレーシアには、実力のある若手の新人歌手がたくさんいますので、彼らに大きな期待を寄せています。世界で活躍しているマレーシア出身の歌手 Yuna や Najwa Mahiaddin、Shila Amzah などは素晴らしい刺激を与えてくれます。これからさらにマレーシアの若い歌手が彼女たちに続いてくれることを願っています。

日本の読者にひと言お願いします。

「iTunes や YouTube で Adibah Noor を検索して、私の曲を聴いてみてください。気に入ってもらえると嬉しいです。そして、いつか日本で歌う機会に恵まれることを願っています！」

アディバさん出演の映画
日本全国にて公開中!
『タレントタイム〜優しい歌』



原題: Talentaime
2009 | マレーシア | カラー | 115分
マレー語・タミル語・英語・広東語・北京語
監督・脚本: ヤスミン・アフマド
撮影: キョン・ロウ 音楽: ピート・テオ
出演: パメラ・ジョン、マヘシュ・ジュガル・キショーールほか
配給: ムヴィオラ
詳しくは公式HPをご確認ください
<http://moviola.jp/talentaime>

映画『タレントタイム』で、アディバ先生役として、音楽コンクール「タレントタイム」の審査員を務めるアディバ・ノールさん

(映画に関するエピソードは、Hati MalaysiaのWEBサイトをご覧ください)

アディバさんのインタビューに登場した
マレーシア国内外で活躍する
注目の女性歌手たち



Shila Amzah

シーラ・アムザ/マレー系でありながら中国語の歌も得意とし、中国のオーディション番組に出演したことで中国でも人気が高い。現在は香港をベースに活動を広げている。



Najwa Mahiaddin

ナジワ・マヒアディン/2011年にデビューし、マレーシア版グラミー賞第18回 Anugerah Industri Muzik (AIM) にて最優秀新人賞、最優秀英語歌謡賞を受賞。ソウルフルな歌声が印象的。実は、元副首相のご令嬢。



Yuna

ユナ/2008年にデビューし、軽やかな歌声とオシャレなファッションでアイコン的存在に。2011年に米国デビューを果たし、現在はニューヨークを拠点に活動。2016年には Usher と共演し、米国でも注目を集める。



マレーシアの裏社会を 赤裸々に描いた話題作

マレーシア映画祭最優秀作品賞

JAGAT ～ジャガット～

邦題："世界の残酷"《BRUTAL》

2015年 | マレーシア | 79分

監督：サンジェイ・クマール・ペルマル

出演：ハラヴィン・ラージ、ジブレイル・ラジュラ、キューベン・マハデヴァン

マレーシア映画祭(2016)最優秀作品賞 最優秀新人監督賞
大阪アジア映画祭(2017)特集企画にてジャパンプレミア上映

どこの国にも陰と陽はあるものです。陰は目を背けられ、誰もが好んで話そうとはしません。しかし今回は、マレーシアに実際に存在する裏社会を必死に生きてきた少年の話をご紹介します。そう、その少年こそがこの映画の監督、サンジェイ・クマール・ペルマル。

多民族国家マレーシアではマイノリティにあたるインド系マレーシア人として生まれ、環境に翻弄されながらも自分を見失わずに生きてきた彼だからこそ描くことができた自伝的ストーリーです。2016年のマレーシア映画祭で最優秀作品賞を受賞し、マレーシア映画界に一石を投じた話題作です。今回は、マレーシア映画の字幕監修なども手掛ける戸加里康子さんに監督インタビューをお願いし、映画制作の裏話をお伝えいたします。

<あらすじ>

「JAGAT」は1990年代初頭、国の経済開発から取り残され、さらに急速に変わっていく社会環境の中で、アイデンティティを見失い、ギャング活動やドラッグに溺れていったインド系の人たちの苦境を描いています。見終わった後、人生の厳しさを感じさせるストーリーではありますが、その理不尽な世界に生きる人の生き様を見せてくれる映画です。



構成 / 編集

Rie Takatsuka (ODD PICTURES)

写真提供

Shanjhey Kumar Perumal

協力

大阪アジア映画祭

取材 / 文

Togari Yasuko

戸加里康子。日本マレーシア学会会員、マレー語通訳、著書に「旅の指差し会話帳 マレーシア」など。マレーシアの文化、芸術に造詣が深く、マレーシア映画の字幕監修なども手掛ける。



主人公アポイは上級生にいじめられても歯をくいしばって耐え、屈服しなかった。
そんな彼の唯一の理解者はおじのバラだった

監督・脚本家

SHANJHEY
KUMAR PERUMAL

サンジェイ・クマール・ペルマル

——この映画を作ろうと思ったきっかけは？

「JAGAT」は私自身の半自伝的な作品です。私はずっとこの話を伝えたいと思っていました。テレビ番組を作っていた時は、伝えていいこと悪いことをテレビ局側がコントロールするので、それにうんざりしていたんです。この作品はそれに対する、私なりの復讐のようなものです。

——主人公の少年アポイは、芸術的な才能を見せつつも、インド映画に夢中になって宿題をおろそかにし、学校の先生やお父さんに怒られてばかりいます。あなたも小さいとき、アポイ少年のようだったのでしょうか。

アートは私にとって常に特別なものでした。映画の中で表現したかったのは、子どもの可能性を理解することができないシステムについてです。私の父も本当に厳しかったのですが、私のアートに対する興味には理解を示し、サポートしてくれました。

——映画の中で特に気に入っているエピソードは？

私が一番懐かしく思っているのは、(アポイのおじである)バラとのエピソードです。劇中バラは、アポイの目の前でドラッグを吸います。実は私の本当のおじもバラという名前で、私の目の前でドラッグをやりました。劇中のバラと同じように、私のことを信用して大人のように扱い、多くの知識や人生の経験について語ってくれました。おじは私がドラッグに手を出さないように、自分が破滅していく姿をあえて私に見せたのです。そしてそれは今でも私に生きています。

——「JAGAT」はマレーシアで9週間も上映されました。JAGATのようなタミル語の映画はもちろんのこと、他のマレーシア映画にとっても大変珍しいことだと思えます。観衆からの反応はどうでしたか？

「JAGAT」は大きな予算のある映画ではありません。そのため最初はインド系の人たちだけを対象にしていたのです。しかし、上映館に対する不満をメディアに訴えたことが広まり、都市部では様々な民族の人たちがこの映画を見に来てくれました。実は都市部の人たちは国産の映画を見ることはあまり多くないそうです。マレーシアのインド系も、何十年にもわたってインドで作られたタミル語の映画を見るだけでした。彼らは、マレー系や華人系マレーシア人たちがタミル語の映画により反応を示しているのを見て驚いていました。

——日本の映画祭での観衆の反応はどうでしたか？

日本では大阪アジア映画祭で上映されましたが、観衆からは、それまではマレーシア人については何となくしか知らなかったが、マレーシアのインド系の苦境をより理解したという感想が多かったです。また、この映画が私の半自伝的なものであると知って、私が貧困やシステムから抜け出し、映画製作者になってうれしい、暴力や名声ではなくアートを選んだことをうれしく思う、と言ってくれた人もいました。

(監督インタビュー続編あり。Hati MalaysiaのWEBサイトをご覧ください!)



マレーシアと日本の共同製作映画「クアランプールの夜明け」などODD PICTURES作品のデザインを担当。これがきっかけで「WAU」のデザイナーに



「フォーレン・チャイニーズ」とは造語
あいちトリエンナーレ2010の在外華人現代アートをまとめた企画のチラシデザイン。



物価が安くて庶民的なマレーシアだけではなく、ハイカルチャーな一面も知ってもらいたくて、誌面は気品あるデザインを心がけてきました

和中華の渾然一体をめざして、茶筒に彫られた「四君子」中の菊をトレースして背景にあしらったダイナミックな表紙をデザイン

普遍と差異。 アイデンティティーをめぐる葛藤からうまれるデザイン

Hi, 陳です。「WAU」のデザイナーで、中華系マレーシア人です。

日本でこのように自己紹介すると、特殊な生い立ちのように思われがちですが、中国本土から移住してきた華僑の末裔である華人は今、マレーシアの人口の2割以上を占めています。その多くがまだ自らのマレーシア人としてのアイデンティティーについて揺らぎを感じているように思えますが、さらに日本の暮らしを20年以上も経験した今の私は、どこにいても外国人でもない地元民でもない、半ば遊牧民のような感覚を覚えます。

大学時代の創作活動で、すべての人に偏在する普遍的なテーマを扱おうと考えるのに至ったのは、文化的帰属感を失った私にとって必然でした。ノンバーバル(非言語)コミュニケーションなら、民族や言語をも超えてあらゆる人に共感してもらえると思ったからです。哲学関連の本を読みあさり、手当たり次第に解釈をアート作品に変換しては発表していきました。バックグラウンドの全く異なる来場者から共感をえられたときは、確かな手応えと安堵感を感じるがあります。

でも不思議なことに、そのテーマの普遍性に共感してくれた人は、差異にも興味を示してくれました。「マレーシア人みんなそうなの?」「マレーシアのアートは日本と違う?」などよく聞かれるようになりました。山形県国際交流事業やマレーシアに進出する民間企業から奨学金をいただいた私の中で、日本の人々が知っているようで知ら

ないマレーシアを紹介していく使命感が芽生えたのがそのときでした。

それ以降、私はマレーシアを知ってもらいきっかけづくりとして、アート作品やデザインワークの中にいろいろ仕掛けるように工夫しました。中国本土以外で暮らす「在外華人」アーティストを紹介する展覧会も企画しました。日本との差異を露わにすればするほど、みる人は作品の中から普遍性を見出そうと能動的になる発見がありました。このパラドックス(逆説)は私をアイデンティティーの呪縛から解放し、より大きな自由を与えてくれました。

WAUのメンバーでもあり、マレーシアで映画を撮影した高塚さんに声をかけられたのがきっかけで、2011年から日本語圏向けマレーシアコンテンツに本格的に関わるようになりました。日馬両国に精通し、両方の感性を持ち、なおアートとデザインの実務ができる——という私の個性である要素がそのままピースにハマったような充実感を覚えました。本誌「WAU」のデザインにおいても、私にしかできない異文化の融合を表現していけたらと思います。次号からはさらなる高みをめざして再出発しますので、乞うご期待ください!



TANJC

陳維鈞。デザイナー、現代アート作家。「WAU」創刊号からデザイン担当。76年生まれ。96年来日。東北芸術工科大学(山形)映像専攻と京都精華大学芸術学博士課程出身。京都を拠点に国内外にてメディアアートを中心にクリエイティブ活動中。



Hati Malaysia監修レシピ動画 YouTubeで公開中!

AYAM Since 1932

アヤムを使って本格アジア料理
レシピ動画を見て作ろう!

南国ごはんナシレマ、
ニョニヤチキンカレー、
ココナッツデザートなどが
お家でカンタンに作れます!

スキャン

マレーシア文化通信「WAU」リニューアル決定!

次号Vol.13(9月号)より、ページ増にてお届け。
マレーシアに行ってみたくなる情報満載です。

リニューアルに関するお知らせ、記念イベント情報は
WEBサイトにて随時発信! <http://hatimalaysia.com>

マレーシア
リゾートクラブ
<http://mrcj.jp>
マレーシア、ボルネオ地域専門旅行会社
(株)エムアールシージャパン/東京都知事登録旅行業 3-5248号

malaysia airlines
マレーシア航空
<http://www.malaysiaairlines.com>

マレーシアごはんの会
<http://www.malaysiafoodnet.com>
レシピ『マレーシアごはんベスト10』発刊!
9/2,3横浜にて食文化イベント開催します!

MUTIARA ARTS PRODUCTION
ムティアラ・アーツ・プロダクション
<http://mutiara-arts-production.com>
文化交流事業の企画制作、通訳・翻訳業



古川 音
Oto Furukawa

編集ライター。首都クアランプールに4年滞在した経験を活かし、「All About」や「CREA」ウェブサイトにてマレーシアの記事を執筆。また「マレーシアごはんの会」にてイベントや料理教室を主催。来場者2000人規模のマレーシアごはん祭り、現地ごはんツアーも開催。マレーシアごはんの会 HP <http://malaysiafoodnet.com>



芸能 上原 亜季
Aki Uehara

ムティアラ・アーツ・プロダクション代表。AFS生として一年間マレーシアの高校に留学。Universiti Sains Malaysiaの大学院にてマレーシアの伝統芸能の研究を行い、修士号取得。国際文化会館勤務を経て、現職。東南アジア芸能コーディネーター、イベント企画・制作、記事執筆、マレー語通訳・翻訳。 <http://mutiara-arts-production.com>



映画 高塚 利恵
Rie Takatsuka

映像プロダクション、株式会社オッドピクチャーズ代表。インディペンデント映画プロデューサー。日本国内にて映像によるプロモーションの企画、撮影。マレーシアの映像制作プロダクション(ODD PICTURES MALAYSIA)と連携した映像・映画製作など。 <http://odd-pictures.asia>

伝統とは時代とともに変わるもの。表紙インタビューでイブラヒム会長とお会いし、そう感じました。核となる大事なものはそのままに、現代の私達に寄り添い、たえずエールを送ってくれている。現在のすべては先人たちの知恵の積み重ねであり、これからのつながっていく。そう思うと、多くの人に応援されているように、あつたかい気分になるんです。

マレーシアで好きな歌手を聞かれると一番にアディバノールさんと答えていました。安定感のある歌に包み込まれるようで、いつも歌番組に出てくると嬉しくなりました。先日、地元の写真館で「タレントタイム」の大きなポスターを見て思わず立ち止まりました。マレーシア映画が日本の私たちの日常の中にある。そこにはアディバノールさんの姿もある。不思議で、なんだか感慨深い瞬間でした。

今回ご紹介した作品「MAGATI」の監督は、インド系マレーシア人。多民族国家マレーシアの中ではマレー系、中華系に次ぐ人口を擁する民族です。インド系マレーシア人を見る映画はインドで作られたタミル語の映画が主で、マレーシアにまつわる話をタミル語で見られるのは珍しいと、国内でも話題になりました。WAUでもインド系の監督をご紹介しますのは初めてです。これからは、マレーシアらしく色々な民族の映画をご紹介できれば嬉しそうです。

